

トドの行動を探る第一歩～生体捕獲の試み～

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 水産研究・教育機構
	公開日: 2024-07-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 服部, 薫
URL	メールアドレス:
	所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2009761

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



トドの行動を探る第一歩 ～生体捕獲の試み～

資源管理部 高次生産グループ長 服部 薫



今年の1月、小定置網によるトドの生体捕獲に成功しました。

野生生物に発信機を装着しその行動を知るテレメトリー調査は、普段目に触れることの少ない海生生物において特に有効な方法です。北海道や青森には冬期にトドが来遊し、沿岸漁業に深刻な被害をもたらしています。その移動経路や摂餌域などは良くわかっておらず、行動を探る調査が必要なため、発信機の装着を試みました。

発信機を装着するにはまず生きた個体を捕獲(生体捕獲)しなければなりません。トドは海の中を自在に動き回り、子どもでも100kg近くになるため、捕獲は容易ではありません。当研究所では平成17年より様々な方法で日本海のトドの生体捕獲にチャレンジしてきました。トドが上陸する岩礁に捕獲罟を設置すると全く寄り付かなくなったり、岩場で寝ているトドに首輪を片手に泳いで近づくものの、あと一步で取り逃がしたりとうまく行かず、偶発的な混獲ではなく狙った時期に狙った場所で捕獲をするというのは積年の課題でした。

トドが多く来遊する12～2月は、日本海では時化が続くため、上陸岩礁に船で近づくことすらままならず、生体捕獲が難しい状況でした。事態打開に向け、平成28年12月から比較的海況の安定する根室海峡に場を移し、小定置網による捕獲にチャレンジしました。トドは定置網などに入り込み、漁業被害をもたらします。その習性を利用し、実際に操業する小定置網を用いて魚を追って魚捕部(魚がたまる場所)にトドが入ったところを生体捕獲できないかと考えました。試行錯誤を重ねながら年が明けた1月、2頭のトドを生体捕獲することができました(写真1)。

捕獲までの数日、小定置網はトドの餌場になっていたのか、魚捕部の入り口や海面から自由に出入りしていました。警戒心が薄れてきたところで満を持して天井網をかぶせた翌朝、魚捕部から出られなくなった1頭のトドが！ 船に乗り込み捕獲作業に向かう間、麻酔をうまく打てるか、船に引き上げられるかなど心配を抱えていましたが、協力いただいた漁業者の方との連携もばっちり、麻酔・引き揚げ・発信機装着・放獣の一連の作業を無事終えることができました(写真2)。2頭目は翌朝、入り口付近でたむろするトドを船で追い込み捕獲しました。トドは一斉に魚捕部に逃げ込み、一時10頭弱も入ってしまいましたが、離れて様子を見ていると1頭を残し入り口から出て行ってくれ無事に発信機を装着できました。

発信機によって海面に浮上した際の位置が衛星を経由して取得できます(図1)。根室海峡では、冬期に沿岸で

のんびり漂っている姿が観察されていましたが、その行動圏は十分わかっていませんでした。本調査で対岸の国後島はもとより、歯舞群島を行き来している様子が確認され、予想より広い海域を利用していることが明らかとなりました。

生体捕獲において最も重要なことは、人にも動物にも安全な方法で行われること。本調査では、捕獲から放獣までの一連の作業が無事滞りなく行われ、また驚いて網に入ったトドも落ち着くと入り口がわかって出ていくというのは、安全な捕獲方法を目指す上で重要な知見となりました。今後もトドの生体捕獲調査を進め、行動把握に取り組んでまいります。

この場をお借りして、本調査にご協力いただいた羅臼漁業協同組合関係者の皆様、ならびにこれまで生体捕獲にご協力いただいた石狩湾・猿払村の各漁業協同組合関係者の皆様、および関わってくださった多くの皆様に深く感謝申し上げます。

※本調査はNPO法人水産業・漁村活性化推進機構からの委託を受けて行っています。

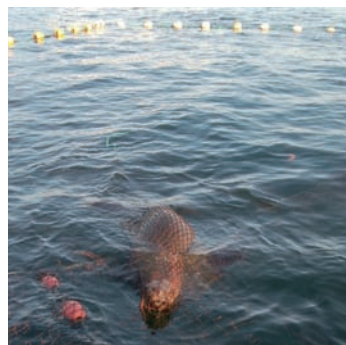


写真1 小定置網の魚捕部に入ったトド
茶色の網が魚捕部の天井網です



写真2 網の中のトドに麻酔を打つ様子

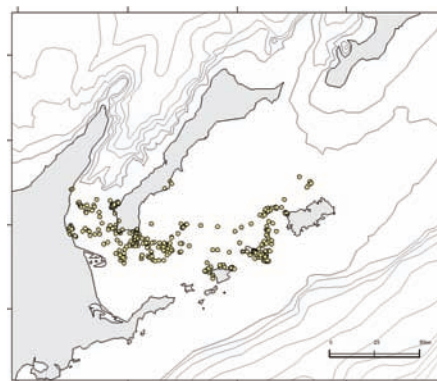


図1 1頭目の追跡結果 黄丸がトドの位置情報(1月19日～4月30日)